

確変凶柄氏の 友情ある勧誘



東江一紀

ネイティブ要らんかね、と、マット・スカ
ダー訳者が言うのである。

このおっちゃん、なんのセールスを始めた
のであるうか。売りものがわからないのでは、
「間に合ってます」とも言えんし……。
のつけから脱線するようだが、わたし、こ
のマット・スカダー訳者のことを、ひそかに

“翻訳界の確率変動凶柄”と呼んでいる。
と言つても、パチンコをやらない人（そん
な人、いるの？）には、なんのことだかわか
らないだろう。今主流になっているCRフイ
バー機は、数字や絵が三つそろうと大当た
りで、二千発以上の玉がジャラジャラ出てく
る仕組みなのだが、それが特定の凶柄でそろ

った場合、電チュー（電車でチューしている
カップルのことではない。電動チューリップ
の略）の開く確率が大幅にアップして、実質
的に以後二回の大当たりが保証される。
それがなぜ、マット・スカダー訳者の呼び
名になるのかというと、このおかた、ハード
カバーやポケミスで出した訳書が、すんげえ
確率で文庫化されるのだ。つまり、一回訳し
て、二度フイバーするというわけ。
なんと、その率、五割以上だという。残る
四割強だって、ほとんどがこれから文庫化さ
れるタマだ。
比べてもむなしけれど、わたし、これまで
十五冊のハードカバーを出して、文庫化され
たことが一度もない。それどころか、絶版率
が七割を軽く超えちゃう。
富は偏在するのである。
で、冒頭に戻るが、その翻訳界の確率変動
凶柄氏がですね、どうやらネイティブの行商
をしているらしい。なんじゃ、それ？
よくよく事情を聞いてみると、ネイティブ
というのは、氏が数年前から英会話の個人レ
ッスンを受けたり、翻訳上の疑問点を質した
りしていたイギリス人のことであつた。
このイギリス人、頭文字を取ってSSとし
ておこう。およつ、今をときめく最強の種牡
馬サンデーサイレンスみたいで、かっこいい

なあ。でも、こっちのSSは、どうも気弱で、不器用で、しょぼい人物のようだ。

仕事ぶりはていねいだし、まじめでいいやつなんだけど、生活力がまったくないんだよなあ、と、確変図柄氏は言う。それで、見るに見かねて、氏が無償の営業活動をくり広げてやっているとこなのだった。

SSはどこへでも参上して、英語や西欧文化についての疑問に答えてくれるし、希望があれば英会話を教えてくれるという。お安くしときますよ、ともいう。ゆっくりしゃべってくれるからさあ、ともいう。

うらむ、ぐいぐいと心に食い込んでくるセールストークではないか。なんといつても、異国で心細く暮らす友をもち立てようとする確変図柄氏の熱意が泣かせるし、まじめで生活力のないイギリス人というキャラクターが笑わせる、いや、やっぱ泣かせる。

実を申せば、わたし、生のネイティブというやつが大の苦手である。火を通したネイティブならだいじょうぶかって、そういう問題ではない。

わたしがどうにか相手にできるのは、字に書いたネイティブだけである。つまり、読むだけね。しゃべると聞くのは、からっきしだめ。学生時代に留学を勧められて、びびってしまい、代わりに三回も留年したほどだ。

商売柄、自分が訳した本の著者が来日したりすると、一度は必ず会わされる。これを逃れるには、時期を合わせて海外へ出かけるぐらいしか方法がないのだが、それじゃあ、わざわざ金をかけてネイティブの本場へ乗り込むことになってしまう。

まあ、しかたなく会いますわね。わたし、とにかく視線を合わせないようにする。同席した編集者と、急に関係のない打ち合わせを始めることもある。目が合ったりすると、あいつら、話しかけてきますからね。

いや、逃げ隠れしてもむだである。結局は話しかけられてしまう。いやがる相手に無理やり英語で話しかけるなんて、セクハラではないのか！ 義憤を胸にたぎらせながらも、わたしの顔はジャパニーズ愛想スマイルを浮かべている。ほんとは、ひきつって、表情が変えられないだけなんだけど。

こうなったら、猛毒スネークにいらまれたケロケロケロピピだ。こっちが何も答えないもんだから、相手は同じセンテンスを何度もくり返す。しかも、わたしをなぶるように、一語ずつ切って発音する。切ってもつないでも、英語は英語だ。わかるわきゃない。

たとえ相手の言うことがわかったとしても、答えを返すなどという業は、わたしの能力の範囲を大きく超えている。著者はきつと、「こ

んなやつに俺の作品を翻訳させといて、だいじょうぶだろうか？」と考えているに違いない（もちろん、英語で）。

かくして、モノリンガルの翻訳者は、青い目や緑の目や灰色の目の著者と黒い目の編集者に、いつも白い目で見られるのであった。

ああ、情けないようつ。というような対ネイティブ戦全敗の記録を持つわたしに、確変図柄氏のセールストークは福音のごとく響いた。（ははは、やっと話がつながったぞ）

とりあえず、わが舎房で月一回行なっている翻訳の勉強会に、SSに来てもらい、四、五人がかりで質問をぶつけることにした。

しばらくはこの形で、日々の翻訳作業で生じる疑問点をかたづけていき、そのうち時間と資金に余裕ができれば、集中的に会話のレッスンでも受けようかともくろんでいる。

いやあ、わたしにもついに、国際派翻訳家への道が開けたというわけである。感無量。（ところで、その「時間と資金」というやつは、どこから引っぱり出してくるのか？）

SSは最近、FAX質問回答サービスという新方式を編み出し、慈愛無辺の確変図柄氏が、翻訳者忘年会で数十人の同業者に手作りチラシを配っていた。一問五百円だった。

未来は明るいという気が、少しする。